

---

# 宇宙 そら のうた

井上 珠月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宇宙 そらのうた

### 【Nコード】

N1587Y

### 【作者名】

井上 珠月

### 【あらすじ】

地球が滅びてから三百年後。宇宙の星々はマクシミリアンと名付けた謎の宇宙生物の脅威に晒されていた。人類は生き残るためにグレイドと呼ばれる戦闘ロボットを開発してマクシミリアンと戦っていた。ガリア星からの帰りに、そこに四百年以上眠っていた地球人が発見され…。

## プロローグ（前書き）

小説家になろうでは初投稿です。稚拙な文章力ですが、よろしくお  
願いします。不定期更新になると思います。

## プロローグ

地球はもう終わる。

薄れゆく意識の中で血だらけの男は最後の力を振り絞り、目の前のスイッチに手をかけた。

目の前には、百年以上も前から眠ったままの少女の映像が映し出されていた。

幸せそうに眠る少女は美しく見え男は安らぎを覚える。

祖先から託された少女だった。

彼女は彼の持てるすべての技術を詰め込んだ生命維持のための水膜に覆われたカプセルの中に入っている。

地球が謎の宇宙生物の侵略を受け始めてからもつすでに百年以上の時が経っていた。

シオンの歌をもう一度聞きたいな。

それが、彼女を護り続けてきた曾祖父の最後の言葉だった。

彼は彼女のこととはまったく知らないが、曾祖父が彼女に惚れ込んでいたことだけは知っていた。

だから、彼は曾祖父の意思を継ぎ彼女を目覚めさせるために尽力してきた。

古いディスクから流れる彼女の歌声は曾祖父が聴きたがる訳がわかるほど心に響いた。

時に力強く、時に優しく、彼だけでなく聴くものは魅了される。

彼自身、彼女が目覚めた時は精一杯面倒を見ようと思っていた。

そして、曾祖父が聴きたがっていた彼女の歌を生で聞きたかった。

しかし、それができないことは明白であった。

地球はもう滅びる。

そして、自分の生命ももう終わってしまふ。

彼は最後の力を振り絞り彼の最高傑作でもある地球初、いや人類初であろうグレイドを宇宙に放つことを決めた。

曾祖父の想い人であり、自分の初恋でもある彼女を護るために。

地球を護るためには間に合わなかったが、彼女のことは護れるだろう。

彼がスイッチを押した途端に、宇宙に向かってカプセルは放たれたのだった。

どうか、神よ。彼女が目覚めたときに世界は優しく明るいものでありますように。

神に祈ったことのない男の涙ながらの最後の願いだった。

次の瞬間、地球は大爆発を起こして消滅した。

宇宙生物のせいか、それに対抗しようとした人類の反撃の核兵器の為だったのかはわからない。

とにかく、地球は跡形もなく吹き飛んでしまった。

宇宙に投げ出されたカプセルは、誰の目にも触れることなく宇宙をさま迷っていた。

彼女が眠り始めてから、すでに百年以上は経過している。

地球消滅の話はすぐに宇宙の各惑星に伝わり、未確認生物から惑星を護るためにグレイドの実用化が勧められることとなった。

だが、地球でグレイドがひっそりと開発されていたことを知るものは誰もいなかった。

地球から放たれたカプセルが発見されることはまだずっと先のことであった。

## 眠れる美少女

『艦長、ガリア人の乗ったカプセルを回収、今よりレジエンドに帰艦します』

通信モニターに映る映像にアリアクロス星最大の人工都市エターナルに付随している戦艦レジエンドの艦長はため息を小さくついた。

今年に入り、ガルド星からの脱走者や難民が増えている。

「……レジエンドは難民救出船ではないのだがな」

「……言いにくいのですが、前方1000フィードの場所に生命反応確認しました。小型のカプセル型飛行物体と思われます」

「…通信せよ」

「何度も通信を申し入れているのですが応答はありません」

「…偵察隊を出すか」

通信に答えないとなると厄介な相手の可能性もある。

現在、母星であるアリアクロス星はマクシミリアンと名付けた宇宙生物体から攻撃を受けている。

名高い惑星が次々とマクシミリアンの脅威にさらされていた。

各星々は対抗措置のため技術の提供をしあい、マクシミリアンに対

抗すべくグレイドと呼ばれる人間の乗る戦闘用のロボットを開発した。

アリアクロスは膨大な資源と高い技術力のお陰でグレイドをいち早く実用化でき他星にも多く提供していた。

しかし、グレイドを実用化できない星は次々と滅亡の一途を辿っている。

現に300年前、最も美しい惑星と謳われた地球の消滅もグレイドがなかった為といわれている。

地球人の多くは他星に移住していたが、地球と運命を共にした者も少なくなかった。

今、まさにガリア星も地球と同じ道を辿っている。

したがって難民が増えるのは無理はないが、あいにく敵はマクシミアンだけではなかった。

グレイドを否定する人々も存在しいち早くグレイドを完成させたアリアクロスに反感を抱いているものも多くいる。

マクシミアンとの戦いにもさることながら、グレイドは星同士の戦いにも重宝される兵器になることは間違いないからだ。

ガリア人の中にもそういつた思想が根付いており、マクシミアンよりアリアクロスの方が厄介だと思っている人間もいる。

返答がないということは、そちらの線が強い。

艦長のゼルダは小さくため息をつくと保護したあとのことを考え、頭を悩ませる。

「…偵察隊を出す。攻撃してくるようなら撃って構わん」

苦渋の選択である。

クルーの表情が暗くなる。

マクシミリアンならともかく同じ人間ならば後味は悪い。

「…出れる者がいないなら私が行こう」

ゼルダはクルー達の表情を見て自らがグレイドを操縦すると言う。

人間を攻撃すれば責任を問われるだろう、いつそ、その責を自分が負った方がいい。

それが元グレイドのエースパイロットとしての責務だろう。

「…貴方を行かせられるわけないでしょ。俺が行きます」

艦の最高責任者を行かせるわけにもいかず、グレイドパイロットの小隊長ハルが手を上げる。

ハル・ジェイドは16歳の次代の優秀なエースパイロットである。

できることなら行かせたくはないが、他に適任者もない。

「…危険が伴うが大丈夫か？」

「グレイドパイロットには常に危険が伴うものでしょう？」

苦笑し、ハルは言う。

「……よからう。油断はするな」

ゼルダは表情を引き締めて言う。

「油断はしません。もし、マクシミリアンならばカプセルごと吹っ飛ばします」

ハルも神秘的な面持ちで答え、ブリッジを出て、グレイドの置いてある格納庫に向かう。

「…艦長、カプセルを遠隔解析したのですが、どこの星の物かわかりません。マクシミリアンとも違うような気がします」

解析を行っていたオペレーターの言葉にゼルダは眉根を寄せる。

『準備出来ました。ハル・ジェイド、アルテミス 出ます』

暫くして、グレイドに乗り込んだハルから通信が入る。

ハッチが開き、ハルの乗ったグレイドは宇宙に飛び出していく。

「ハル、出所不明のカプセルだ。危険と思ったら直ぐに帰艦せよ」

『了解』

ゼルダの言葉にハルは短く答え、カプセルに向かって行く。

十分ほどして、カプセルが見え、ハルは一瞬戸惑った。

今まで見たことがないタイプのカプセルだ。

グレイドを飛行型から人型に変型させるとハルは慎重にカプセルに近づいていく。

『目標を捕捉。接触します』

ハルは言うとかプセルを覗き込んであつと声をあげた。

「どうした？ハル、大丈夫か？」

ゼルダは声を上げたハルにすぐさま声をかける。

『すみません、大丈夫です。……カプセルの中には裸の女の子が乗っています。ただ、水のような膜の中に入っていて眠っているように見えます。どうしますか？』

ハルは見たままを報告する。

声を上げたのは水の中の少女が裸だったからだ。

『それと、初めて見るタイプのカプセルです。何か、文字が書いてありますけど……。俺には読めない文字です』

ハルは女の子から視線を移しカプセルを観察する。

一通りの惑星の文字は勉強したがそれはハルが見たことのない文字だった。

「……マクシミリアンでも難民でもないとしたら、一体何者だ？ハル、簡易検査を」

『…試みていますが測定不能。それに登録証もないみたいです』

カプセルを触りながらのハルの返答にゼルダはため息をついた。

「……危険はないと判断する。ハル、カプセルを回収し帰艦せよ。医療班は格納庫に待機。カプセルの中の少女の回復を。レイス博士はカプセルの分析を」

『了解。アルテミス帰還します』

ゼルダの言葉に周囲は慌ただしく動き始める。

ハルはカプセルの取っ手を掴むと抱き抱えるようにゆっくりと動き出し、戦艦レジェンドにゆっくりと向かっていく。

ハルは眠る少女から目が離せずにいた。

とても可愛らしいと思った。

しかし、首を振りすぐに気を引き締める。

何者かわからない以上、敵の可能性もあるからだ。

彼自身、家族や何人もの仲間をマクシミリアンに奪われている。

敵ならば、然るべき処置をとらなければもっと多くの仲間を失いかねない。

敵でなければいい。

そう思い、ハルは眠れる少女を一瞬だけ見て笑うと、レジェンドに向かっていく。

このカプセルと少女が後に大きな変革をもたらすことを、今は誰も知る由はなかった。

## 目覚めた少女

「……あー」

オペレーターの一人、エミリアがおずおずと手を上げた。

「…カプセルの文字ですが、地球のものと思われます」

「……地球？ばかな。地球はもう300年前に滅びている」

エミリアの言葉にゼルダはあり得ないと首を振る。

「『はやくおきておまえのうたをきかせてくれ』』しあわせになれよ、しおん』あとも同じようなことが別々の筆跡で書かれているようです」

エミリアはハルから送られた映像の文字を読み上げる。

「…でもこれ、日本語です。おかしいですね。日本は400年前に海に沈んだはずですけど」

エミリアは言いながら首を傾げる。

「…とにかく、今は回収が先だ。エミリア、君にはカプセルの他の文字も読んでもらうことになるだろう。すまないが格納庫に待機していてくれ」

「はい」

エミリアは返事し立ち上がると格納庫に向かうため、ブリッジを出ていく。

「…今日は拾い物が多いですね」

副官のルミエールがゼルダに声をかける。

「…ああ。難民はともかく、正体不明の少女か。暫くは監視対象になるな」

「……裸の女の子の監視か。かなりの役得ですね」

「…服は着せろ、服は」

ルミエールの冗談を軽く流し、ゼルダは手元のモニターを見る。

「地球製のカプセルだとしても見たことがないものだな」

「……マクシミリアンではないようですね」

ルミエールもモニターを覗き込んで言う。

「…しかし、仮に地球人だとしたら自由はなくなるだろうな」

ゼルダは同情するような表情をしカプセルの中の少女の顔を見る。

眠れる少女は幸せそうに見えた。

「おや、裸の美少女をそんなに凝視しないでくださいよ。娘さんに怒られますよ」

「……」

ゼルダはその言葉に大袈裟にため息をついた。

「最近は何すら聞いてくれない」

ゼルダの発言にルミエールは笑いながら肩を叩く。

「…仕方ないですよ。奥さまとは離婚なされて新しいお父様もいらつしやるんですから」

その言葉に更にゼルダは肩を落とす。

「…貴方はまだ若いしモテるんですから、新しい彼女でも作れば」

ビービー

ルミエールの言葉を遮るように、非常警報が鳴り響き、一気にその場は緊張に包まれる。

冗談を言い合っていた艦長と副官はすぐに厳しい表情になり、緊急モニターに目をやる。

「前方2000フィードにマクシミリアン確認。こちらに猛スピードで向かってきています。アルテミス帰還まで500フィード、このままでは追いつかれる可能性があります」

「ハル、マクシミリアンが近付いている。加速ブーストは使えそうか？」

『このカプセルに耐久性があるかわかりません。このまま、マクシミリアンを迎撃します』

「……ハル・ジエイド、戻ってきなさい。空いてるパイロットは直ちに迎撃準備」

『俺ならだい』

「カプセルの少女を危険に晒すつもりですか？」

ルミエールの厳しい言葉にハルは何も言えなくなる。

『……了解しました。ブーストは使いませんが急いで帰還します』

ハルは小さく言いながら、スピードをあげる。

『アスカ・エミル、グレイド ゼウス 迎撃準備出来ました』

『カウス・エグセイ、グレイド アテナ 同じく準備出来ました』

「…ハルとカプセルを頼むぞ」

『はい！』

艦長の言葉に二人は返事をし、彼らの乗ったグレイドは宇宙に飛び出していく。

「砲撃の準備を。軌道は右舷185°だ」

「…それではマクシミリアンから大分離れますが」

「マクシミリアンは必ずその位置に移動する」

ゼルダは自信ありげに言う。

「了解しました。エネルギー充填始めます」

「……元エースパイロットの勘というやつですか？」

「……そうかもな」

「マクシミリアンがアルテミスに追い付きました」

オペレーターの声に緊張が走る。

『うわっ』

「落ち着け、今、アスカとカウスが向かっている」

『違います。カプセルが発光して……』

急にハルの通信が途切れ、大きな咆哮がした。

ブリッジのクルー達は緊張の面持ちでモニターを見つめる。

『……………グレイド？』

ハルの小さな咳きか聞こえる。

「ハル、何があつたんです」

ルミエールが問いかける。

『……カプセルが急に発光して手元を離れ変形しました。グレイドのように見えます』

ハルは呆然としながら答える。

『ハル、大丈夫？つて、何コレ？え？グレイド？』

『……アリアクロス製ではなさそうだな』

ハルと合流したアスカとカウスの通信も入ってきた。

彼らも驚きを隠せないようだ。

「映像を送ってくれ」

ゼルダが冷静に言う。

『え？送っているはずですけど、見えませんか？』

ハルは驚いたように言う。

「何者かの妨害電波のために映像が遮断されています」

オペレーターが手元を操作しながら言う。

「カプセルの自衛システムが作動している為と思われる」

オペレーターがモニターから目を離さずに報告する。

『……マクシミリアン確認、編隊を組んで迎撃します。未確認グレイドは我々に攻撃の意思も逃亡の気配もなさそうです』

ハルは混乱しそうな頭で、見たままの状況を説明する。

見たことのないグレイドのようなロボットは全く動かなかった。

操縦士である少女が眠っているのだから当たり前だ。

「…………許可する。未確認グレイドがおかしな動きをするようなら直ちに撃ち落とせ」

『『はい！』』』

ゼルダの言葉にパイロットたちは訓練通りの編隊を組むと、マクシミリアンに向かっていく。

その時だった、先程の咆哮が聞こえ未確認のグレイドが幾筋もの光を出したのは。

『『『！？』』』

グレイドパイロット達を避けるように光は進み、マクシミリアンに光は吸い込まれた。

ブオオ

マクシミリアンの断末魔の叫びが聞こえた。

一瞬だった。

マクシミリアンは跡形もなく消え去り残ったパイロットたちは呆然と謎のグレイドを見る。

『……何があったの？』

『わからん。ただ、あのグレイドがマクシミリアンを消し去ったことだけは確かだ』

『……何なんだよ、あれ？』

「……状況を説明しなさい」

ルミエールが通信をする。

『謎のグレイドが一瞬でマクシミリアンを消し去りました』

ハルはグレイドを見ながら答えるが頭が混乱していた。

少女は眠っていたのだ。

攻撃など出来るはずがない。

それならばグレイドが自主的に攻撃したと言っことになるが、今のグレイド技術はそこまでいいはない。

『……うーん、うるさいなあ。お兄ちゃん？あと5分寝かせてよ』

謎のグレイドから声が聞こえ、パイロットたちに緊張が走る。

聞こえた声は眠たげで、今起きたばかりという声だった。

『……まだ、夜じゃない。何なのよ………って、何じゃコリヤ？  
え？アタシ、裸？はい？何？え？どこ？』

謎のグレイドから混乱したような声が聞こえる。

『………あ、夢か。そうよね。裸で寝るわけないし？夢に決まってるわ』

慌てた声だったのが、気の抜けたような声に変わり、パイロット達は対応に困りグレイドを呆然と見つめるしかなかった。

## 目覚めた少女2 (前書き)

ストックが無くなるまでは毎日更新予定です。

## 目覚めた少女2

「……………君は何者だ？」

誰も言葉を発しない中、ゼルダは謎のグレイドに向かって通信を試みた。

『ぎゃあ！何？誰？……………ああ、そうか夢だもんね。急に声が聞こえてもおかしくないか』

少女の答えにゼルダは眉間にシワを寄せた。

「……………夢ではないと思うのだが？君の登録籍と名前を教えてくださいませんか？」

『……………何か、アタシの夢の中なのに偉そうな感じね。つーか、登録籍って何よ？』

夢の中だと思い込んでいるのか、少女は随分とくだけていた。

「……………惑星国籍のことだ。それからもう一度言っが夢ではない」

『裸で宙に浮いてるのが夢じゃなかったら何なのよ。アタシは露出狂じゃないわよ？てか、惑星ってまたでかく出たわね。アンタは宇宙人か！』

会話にならない相手に、ゼルダは眉間をグリグリと指先で押さえ、次の言葉を考える。

「おやおや、随分面白いお嬢さんだ。我々からとってみれば君も宇宙人だが？」

ルミエールが笑いながら声をかける。

『…タコ足は生えてないわよ？一応、人類だし。しかし、長い夢ね？明晰夢ってやつかしら？』

「……うん、じゃあ、きつとそれだ。因みに我々もタコ足は生えていないよ。で、君の名前は？夢なら教えてくれてもいいだろ？」

ルミエールが更に続ける。

「…何か、さっきの人とは違って小賢しい感じがするわね。ああ、アタシってこんなファンタジーな夢を見るタイプだったのね」

少女は感慨に耽るように呟く。

「……名前を覚えてくれたら服を着せてあげるけど？」

『……セクハラ親父かよ！まあ、服は着たいわね。夢の中でもこの貧乳を晒すのは痛すぎるわ。巨乳でも晒したくないけどさ。アタシの名前は東城シオン。惑星で言ったら地球の日本が国籍よ』

少女の答えにゼルダとルミエールは顔を見合わせる。

『おかしいわ。名前を言ったのに服が出てこないわね。夢なのに』

少女はブツブツ言っている。

「……そうだな、君の近くにグレイド隊が見えるだろう？彼らについてきてここに来てくれたらすぐに服をあげよう。何なら着させてあげるけど？」

笑いながらルミエールは言う。

『……うわあ、キモいわ。アタシの夢の中にセクハラ親父がいる。つて、グレイド？……何、あれ、ガンム？いつの間にかSFチックになってるわね』

「……セクハラ親父か」

ゼルダは思わず嘔き出した。

ルミエールにそんなことを言える人間はそうはいない。

「……あ、着替えさせるのは私じゃなくて艦長の方ですから」

『艦長……何か、ムツツリって言うイメージよね。格好つけてるけど実際は妻とも子供とも上手くいっていなくてどうにもならないダメ男的な？居るのよねー、仕事一筋で家族の中で浮いちゃう人ってな』

「ぶはっ」

今度はルミエールが嘔き出した。

「……とにかく、グレイドについてレジェンドまで来なさい」

ゼルダは微妙な顔で咳払いをし、少女に声をかける。

クルー達は笑いを堪えているのか肩を震わせていた。

『ついてこいって、どうやって動かすのよ？裸で宙に浮いてんのに……。あ、夢だから念力が。って念力が使えないわよ？』

「ハル、アスカ、カウス。お嬢さんをエスコートしてあげて」

ルミエールがパイロット達に指示する。

『『『はい』』』』

『やっぱり……ガ ダムみたいよね？やっぱり核燃料が何かで動いているわけ？夢ってスゲーな』

「……地球では核燃料でグレイドを動かすのか？」

驚いたようにゼルダは言う。

『……さあ？アニメの中ではそんなロボットが存在するけど？アタシはそんなにアニメは見ないからよくわからないわ』

「……アニメ？」

「……地球の文化の一つです。アリアクロスでも子供向けのアニメを移住者が作っています」

オペレーターが口に出す。

『…リアルな上に長い夢よね。早く目が覚めないかしら』

会話に飽きてきたのか少女が現実的な呟きを洩らす。

『……夢じゃない』

言いにくそうにハルは言い、謎のグレイドの後方に立つ。

アスカとカウスは言葉を発さずに謎のグレイドの両脇を固める。

『…夢じゃなかったら何なのよ？アタシが露出狂ってことなの？』

『……未確認グレイドを確保、今よりレジェンドに帰還します。ブ  
ースト許可を』

「……許可する」

少女の問いにハルもゼルダも答えずに短い会話がなされる。

眠っていた少女はとても可愛らしかったが、口を開けばかなり異質  
な感じがした。

喋らなければ美少女だ。

ハルは、少しばかりその少女にときめいてしまった自分を恥じてい  
た。

「ブースト充填まで三十秒。カウントダウンをお願いします」

『……何？ブースト？』

『……黙つて？何かにしがみついでいて。怪我をするわよ』

アスカが少女に声をかける。

『……いや、まったく動けないんだけど？』

『……ホールド装置を作動させる』

カウスが慌てて少女に言う。

『……なにそれ？よく分かんないんだけど？』

『……強制ホールド装置を作動。カウントダウン開始、15、14、13、12、11、10、9、8、7、6、5、4、3、2、1。  
発射』

ハルは言いながら緊急ホールドの光線を少女に向かって放つ。

ゴォア

『……なに？のわあああ』

急激なスピードの中、謎の少女のシオンの変わった絶叫だけがこだましていた。

幸いと言うべきか、ハルのホールド装置は効いているようで、少女が急激な加速でカプセル内で打ち付けられるようなことはなかったが、彼女にとって衝撃的な出来事であったことは間違いなかった。

**警長と副官（前書き）**

読んでくださってありがとうございます。

## 艦長と副官

「……やれやれ、かなり面倒な拾い物をしてしまいましたね？ムツツリ艦長？」

「そうだな、セクハラ親父。どうする？」

「……取り合えず、服を着させればいいんじゃないんですか？」

ルミエールは困ったように笑いながら言う。

ゼルダも大きいため息をつく。

「……まずは、現実だと認識をさせるべきだろうな」

いつの間にか来たのか、レイス博士が進言する。

「……おや、やはり彼女は研究対象ですか？」

「中々、面白い。知らないとは言えアリアクロスの最高位の軍人をポロカスに言えるのだからな」

「……そつちですか」

「それに地球にグレイドが存在したとは知らなかった。しかも、かなり高度な技術と言える、開発者に興味がある」

「……あのお嬢さんには？」

「……ふむ、何故にグレイドに乗っていたのかは気になるな。そして、夢だと思い込むまでの判断の速さが素晴らしい。現実を突きつけたときの反応が楽しみだ」

レイス博士は腕組みをしながら言う。

「……鬼畜博士とか呼ばれそうですね」

ルミエールは苦笑する。

「鬼畜眼鏡だと思います」

オペレーターが訂正するように冷たい視線でレイスを見ながら発言する。

「……誉め言葉だと受け取っておこう」

肩を竦めてレイスはブリッジを後にし、格納庫に向かう。

彼は端から見てもわかるほど楽しげだった。

「……いいんですか？あの女の子レイス博士なんかに預けたら発狂しちゃうですよ？」

鬼畜眼鏡と発言したオペレーターのアイは上司の二人を見る。

彼女はレイス博士に発狂させられかけた被害者でもあった。

「……大丈夫だ。レイス博士は研究対象を壊したことはない」

「そうそう。ああ見えて、外面はかなりいいですから爽やかに接するんじゃないですか？」

「……艦長と副官も鬼畜をつけられますよ。あの男は本当に最悪です。私はあの女の子が心配でたまりません」

アイは非難がましい目で二人を見ると、ため息をつきながら、シオンと名乗った少女の服を用意するためにブリッジを出ていく。

「……さて、じゃあ、鬼畜な我々も眠り姫の観察にでも行きましようか？」

ルミエールに促され、ゼルダもため息をつき席を立つ。

どうも気が重い。

どのようにあの変わった少女と接すればいいのか皆目見当がつかなかった。

眠っているときは、本当に可愛らしい少女だと思ったのだが喋った随分と印象が変わった。

普通に会話ができるのかも疑問である。

それに謎のグレイドに乗っていたのだ。

地球人だと言うが、とうに地球は滅びている。

敵ではないと本能は告げているのだが、立场上厳しい対応が求められるだろう。

それに、詳細を本星であるアリアクロスに送らなければならない。  
頭が痛くなるばかりだ。

副官のルミエールにも気付かれないように、小さくゼルダはため息  
をつくのだった。

パイロットの時は、ただ敵を殲滅すれば良かったのだが艦長となれ  
ばそうはいかない。

自分の至らない点は副官であるルミエールがカバーしてくれるが、  
重要な決断は己が決めなければならぬ。

「……ゼルダ、大丈夫ですよ。貴方の勘は当たる。彼女は敵ではな  
いのでしょうか？」

前を行くルミエールは振り返らずに親友でもあるゼルダに言う。

「……ああ。だが、彼女は政治や戦いに嫌でも巻き込まれるだろう  
な」

「……かつての私たちのようにですか？」

立ち止まるとルミエールは親友を振り返り顔を見る。

「……俺は、お前を巻き込んでしまったことを後悔している」

その言葉にルミエールは表情を変え、ゼルダの襟首を掴んで壁に押し  
付ける。

「……ふざけんな。後悔しているだと？俺はあの時のお前の判断が間違っていたとは思っていない。だから、ここにいる。何度言わせるんだ？次、そんなことを言えば二度と娘と会わさんぞ？」

普段の温厚な面影はなく、本気でルミエールは怒っていた。

「……悪かった。娘に会えなくなるのは困る」

ゼルダは苦笑し、肩を竦める。

何度この事でルミエールを怒らせたことだろう。

「……私は後悔はしていない。だから、二度と口にしないでください」

ルミエールの囁くような言葉に、ゼルダは頷く。

「……ところで、いつまでこの状態なんだ？」

いつもならすぐに離れるルミエールがいつまでも離さないのも、ゼルダは言葉に出す。

「……いいじゃないですか。私とあなたの仲でしょ？」

怒りを鎮め、イタズラっぽく笑うルミエールにゼルダは顔を引きつらせた。

目の端に、服を持ったアイが見える。

悪いと思っているのか視線がこちらに向くことはないが、チラチラと様子を窺っている。

これでは、まるでルミエールに迫られているようだ。

ルミエールは何度も同じことを言わせるゼルダに罰を与えるため、アイがいることを知っていて離れなかったのだと気付いた。

オペレーター達の間では艦長の離婚の理由は男に走ったためだと噂されている。

無論、そんな事実はないが今回のこれで更にその噂が加速するであろうことは間違いない。

「……………本当に娘に会えなくなったら、呪うぞ」

ゼルダは恨めしげな顔をし、本気で言っていた。

「……………じゃあ、責任を持って貴方を幸せにしますよ。でも、男同士の恋愛なんてしたことないからわかりませんがね」

「……………やめてくれ。どうせなら、女に迫られた方がいい」

ゼルダは疲れたように言い、ルミエールの手を払い除けると格納庫に歩を進める。

「……………さっきの話ですけど、貴方は何でも一人で背負いすぎです。私は本当に後悔なんてしていませんよ。むしろ、貴方を誇りに思っている。あの女の子も我々が護ってあげればいいと思いますよ」

後ろからの親友の言葉にゼルダは小さく笑う。

「……そうだな。鬼畜なムツツリ艦長とセクハラ親父の言うことをちゃんと聞ける娘ならいいがな」

「……私だったら、そんな人たちの言うことは聞きたくないです」

「……俺もだ」

答え、ゼルダは笑う。

少しだが、気は楽になった。

昔から変わらない親友とのやり取りであった。

未確認グレイドと謎の少女の保護が吉と出るか凶と出るかは今はわからないが、アリアクロス星に生きる者にとって最善の選択をせねばならないことだけは確かだ。

格納庫に向かうゼルダの表情は引き締まり、最高位と呼ばれる軍人のそれだった。

## もしも（前書き）

サブタイトルを名付けるのは、難しいですね。

## もしも

『……ねえ、貴女、大丈夫？』

アスカはすっかり大人しくなってしまったシオンに声をかける。

『……何か、乗ったことないけどリニアみたいなものかしら。ちよっと頭がふらふらするわ』

シオンは律儀に答える。

『…今から、戦艦レジエンドに帰艦する。怪しい動きをすれば直ぐに拘束する』

ハルがシオンに言う。

『素っ裸で怪しい動きをするってアタシは変態か！っーか、すでに拘束されてますよね？明らかに逃げねえよね？この状態！』

『……変な奴だな。何なんだよ、お前は？』

カウスが呆れたように言う。

『は？アタシはアタシよ。アタシ以外の何者でもないわ。本当にリアルな夢ね、現実みたい』

シオンは基本的に言われたことには返事をするようだ。

ただ、答えになっているかと言えばかなり微妙だ。

少女の返答にパイロット達は困惑していた。

シオンと名乗った謎の少女は本気で夢だと思い込んでいるようだからだ。

『……ねえ？もし、夢じゃなくて本当に現実だとしたら貴女はどうするの？』

アスカはムクムクと沸いた好奇心に耐えられずにシオンに聞く。

『……そうね。とりあえず、何で裸なのかを考えるわ。誰に脱がされたとか何人に裸を見られたとか？いや、それより、ここはどこなのか？とか、うーん、わかんないな』

シオンは考えるように答える。

『……随分、裸にこだわるのね』

アスカは苦笑して言う。

『だってさ、知らない内に裸になってるって嫌じゃない？貴女はまったく知らない人間に裸を見られて平気なわけ？』

逆に聞かれ、アスカは戸惑う。

『…確かに嫌よね。私も耐えられないかも』

『でしょー？夢じゃなかったら悶死しそうだわ』

アスカはシオンの言葉に何も答えられなかった。

これは夢などではなく、間違いなく現実なのだから。

『……とにかく、中に入る』

ハルは二人の会話を遮るように小さく言うと、アスカとカウスを促して開いたハッチから艦の中に入っていく。

グレイド四体を収艦すると、ハッチは閉じる。

『……うわっ』

シオンの小さな叫び声上がり、ドスンと音が聞こえた。

『……いったー。しかも何か濡れてるし……どうなってんのよ?』

どうやら無重力状態だったカプセルは艦に入ったために重力を元に戻したようだった。

落ちた時にどこかに触ったのだろう、カプセルから音楽が聞こえ始めてきた。

『……げ、ちょっと、止めてよ。アタシの歌じゃん!』

シオンは慌てたように言うが、パイロット達に止める術はない。

ただ、流れる音楽と歌声は美しく聞き惚れてしまう。

この空に届け、僕らの想い。

いつか夢の続きを探しに行くから

『何なのよ？何で、夢の中でアタシの歌が流れるのよ！』

シオンは真っ赤になり頭を抱えて顔を隠してしまっていた。

だから、ハッチを進んだ先の格納庫に大勢の人間がいることには全く気付いていなかった。

彼女が大勢の人間に裸を見られていることに気付き絶叫するのはもう少し先のことだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1587y/>

---

宇宙 そら のうた

2011年11月6日04時22分発行